「谷崎」を歩く 8

モダンな街 姉妹の息遣い

芦屋・水道路

水道路、と呼ぶのは、この街にかなりなじんだ人だろう。

六甲山から大阪湾まで南北に注ぎ込む兵庫県芦屋市の芦屋川をまたぐ阪急芦屋川駅から西へ、ブロック舗装された通りに沿ってガス灯を模した街路灯が続く。輸入雑貨ショップやカフェがにぎわう「芦屋山手サンモール」商店街。同県西宮市から芦屋市を経て神戸市まで敷設された幹線水道管が地下を通ることから、通称、水道路と親しまれてきた。

＜土地の人が水道路と呼んでいる、阪急の線路に並行した山側の路を、（三人の姉妹が）余所行きの衣裳を着飾って連れ立って歩いて行く姿は、さすがに人の目を惹かずにはいなかった＞

谷崎が「細雪」で蒔岡家姉妹を描いた水道路界隈は、1920年に阪急神戸線の開通に合わせて駅が設けられたのをきっかけに宅地開発が進んだ、当時のニュータウンだ。沿線には郊外住宅が広がり、芦屋・六麓荘に代表される高級住宅街が生まれた。

「大阪・船場の商人だった蒔岡家が分家を構える地として、古い因習にとらわれない新しさを印象づけるのに、うってつけの街だった」と、芦屋市谷崎潤一郎記念館の永井敦子学芸員(38)は話す。

通りを歩いてすぐに目に留まるのが、とんがり屋根に山小屋風のランプ、ステンドグラスの窓を持つモダンな洋館。「細雪」で姉妹のかかりつけ医として登場した「櫛田医院」のモデルとなった重信医院が、当時のままの外観を残す。

2代目院長・重信光俊さん(85)の父親で初代の政英さんは、谷崎が松子夫人と暮らした芦屋・打出の家を往診していた。

44年4月、政英さんが亡くなり、葬儀に参列した谷崎は、「坊ちゃん、お父様が亡くなられて大変だね」と、光俊さんに声を掛けたという。その後、「時局にそぐわない」として発禁処分になったにもかかわらず、自費出版した「細雪」上巻を医院に届けに来た。「重信先生御霊前」と自筆のサインが書き添えてあった。

光俊さんは「丁寧な話し方をする物静かな人だった」と谷崎を思い出す。

界隈では谷崎が闊歩する姿がよく見られた。沿道にある和菓子屋「杵屋」を営む内藤充康さん(76)は「谷崎先生は着物姿で下駄の音をさせていた」と振り返る。

41年から、戦火を逃れて熱海、静岡県）に疎開する44年まで、谷崎は、水道路に近い木場悦熊邸に幾度となく訪れ、数日から1週間滞在して「細雪」を執筆した。木場は谷崎と松子夫人の結婚の媒酌人を務めた友人だ。谷崎が滞在する時には、必ず、「杵屋」に和菓子の注文が入り、父の倉治さんが木場邸に届けたという。

木場邸は芦屋川から西約700～800㍍離れていると書かれた蒔岡家分家のモデルとされる。

水道路を抜け、六甲山を仰ぎながら、急な坂道を上がる。当時の木場邸はすでに取り壊され、石垣に囲まれた大邸宅になっていた。

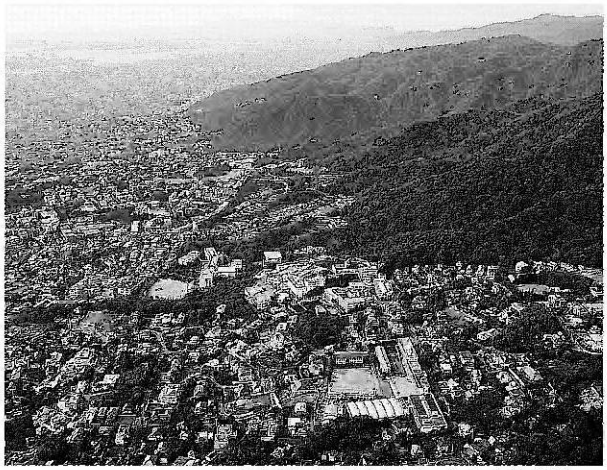
一息ついて、振り返る。新緑に囲まれたお屋敷街の向こうに、海が輝く。

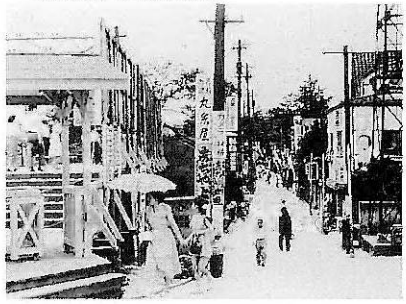
＜雪子はたまに上本町の本家へ帰って四五日もいてから（芦屋の蒔岡家分家へ）戻って来ると、生まれ変わったように気分がせいせいするのであった＞

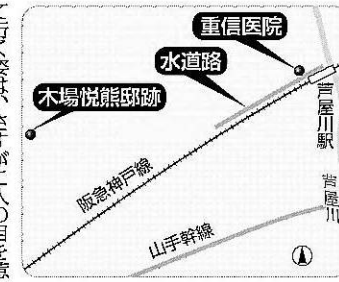
「細雪」の一節が浮かんだ。

（川本修司）

おわり







⬆山と海が溶け合うまち、芦屋。谷崎が愛し、「細雪」の姉妹が暮らした（本社ヘリから）
⬇昭和26年当時の阪急芦屋川駅周辺。木場邸に滞在していた谷崎も散策でこの道を歩いたのだろう（芦屋市提供）

メモ 谷崎は短編ミステリー「日本に於けるクリップン事件」でも、「細雪」同様に大阪・船場から芦屋に移った夫妻を主人公にしている。＜最近にこそ急激な発展をしたものの、（略）山手の方は、その時分は至って淋しい場所＞と描いている。

ハナヤ勘兵衛「船出」（1936年）

阪神間は外国人が多く、「細雪」にもドイツ人一家が登場する。彼らが故郷へ帰る時、幸子や妙子は神戸港へ見送りに行く。美しくも哀愁深い別れを描く谷崎の叙述を、そのまま写しとったかのような1枚だ。芦屋市立美術博物館蔵。（井上勝博・芦屋市谷崎潤一郎記念館学芸員）

芦屋市谷崎潤一郎記念館（兵庫県芦屋市伊勢町12の15）で6月26日まで開催している春の特別展「四姉妹の昭和―よみがえる『細雪』の世界―」で展示